



サクリファイス

登場人物紹介

ドミネート 長い黒髪に黒いジャケットの男。 通称・支配者 暗殺者 ランキングA（賞金首）
能力 クリプト・シー

シグレ 運び屋 モヒカン頭の巨漢。 能力 ペアレント

ミソギ 武器商人 世界中の覇権を裏側で操る大企業の社長。世界各国に武器を輸出している。

夜の路地だった。

そこは、無法者達が取引に使っている場所だった。

壁は銃痕の上を、ドブネズミが這い回っている。

黒衣の男、ドミネートが落書きばかりの壁を背に、時間を数えながら、路地裏へと入る。取引相手は、時間を守ってくれるだろうか。

指定された場所には、モヒカン刈りにした大男が立っていた。

彼は手にしたバッグを、ドミネートに渡す。

「数えるか？」

ドミネートは札束を手にしてめくっていく。

「いやいい。どうやら、約束の金は入っているみたいだしな」

彼は面倒臭そうな顔をする。

何もかもが、億劫そうだった。

「なあ、『支配者』。俺にはお前に少し興味があるんだが」

「ほう？」

「手合わせ願いたい。それから、お前の素性に興味がある」

ドミネートはサングラスを弄る。

「地下銀行に金を入金してからな」

大男は頷く。

ドブネズミ達は、ポリバケツの腐臭に集まってカロリー過多の残飯に群がり、肥え太っていた。

十

「これは年代物のバーボンなんだが」

ドミネートは紫煙を燻らしていた。

二人は酒の空瓶が入った箱の上に座っていた。

「俺はビールの方が好きだな。トウモロコシで作られた奴がいい」

「そうか」

そう言いながらも、モヒカンの男から渡された瓶に口を付ける。

そして、顔を顰める。

野良犬が、ゴミ箱を漁っていた。

「『クリプト・シー』。それが俺の能力だ」

「そういう名らしいな。俺は“シグレ”と呼んでくれ」

男は歯を剥き出しにして笑った。

サイレンの音が鳴り響く。

パトカーが止まり、何名もの警官隊が二人に銃口を突き付けていた。

その中から、黒いスーツ姿の男が出てくる。

「俺は警官であると同時に、お前らブラック・リストに入っている連中を捕まえる為のハンターだ」

「ああん？ 支配者の方ならともかく、俺はタダの運び屋だぜ？」

「シグレ」

ドミネートは冷たく笑う。

「俺とやり合いたいんだろう？ 此処でいいぞ？」

「そうかい」

二人は互いに睨み合っていた。

シグレはおもむろに、両手を動かしていく。

ドミネートはコートの中から、ナイフを取り出す。

ハンターを名乗った警官の袖の中から、小型機関銃が現れる。それと同時に警察官は、二人に向けて発砲していく。

「おいおい、ドミネートならともかく、俺みたいなの、こんな雑魚野郎、大がかりで捕まえて、すげえな」

大男は手を叩いて挑発する。

警察官の何名かの頭が、見えない何かによって握り潰されていく。

路地裏の壁に破壊音が鳴り響いていく。

ドミネートとシグレは戦い続けていた。

パトカーの一つが吹っ飛ばされる。

「ほう、これはお前がやったのか？」

「まあな」

ドミネートはナイフを振り翳しながら、シグレの攻撃を防いでいく。

二人はそのまま壁を蹴りながら、建物の屋上へと向かっていく。

しばらくの間、二人は攻防を続けていた後、ふいにシグレの方が距離を置いて、韜晦を含んだ声で言った。

「この腐った街は良い眺めだな」

シグレは笑う。

ドミネートは黒いコートを脱ぐ。

彼は細身の、引き締まった筋肉に覆われていた。

「お前、ランクは？」

「あーあ？ Cだってよ」

「もう少し、上に見えたが」

ドミネートは、賞賛とも皮肉とも言えない口調で言った。

「いや、俺はEくらいでいいさ。支配者、お前は目立ち過ぎだ。一時期、荒稼ぎしていたそうじゃねえか。なあ、沢山、殺したんだろう？」

ドミネートはかなり不愉快な顔になる。その眉間が歪んだ。

そして。

ドミネートのナイフが長く伸び、モヒカン男の首を落とそうとする。

ぱしゅっ、と。

優男の刃が弾かれる。

「ドミネート、俺はお前のこの世界に対する怒りに興味があるんだ」

彼の眼には暗い感情が宿っていた。

「武器商人ミソギとアサイラムが動くらしい。俺はそれに関わろうと思っている。どうやら、砂漠の方にいる狂信者集団が事を起こしたんだとよ」

「狂信者ねえ……」

ドミネートは、遠い国のニュースには余り興味が無い。地方のローカル紙くらいしか読まない。情報が必要ならば、同業者に聞けばいい。

「シグレ。俺もお前に少し興味が湧いた」

ドミネートは、自らの手にする刃物をくるくる、と、回転させながら告げた。

「あん？ 俺にか？」

「お前は、何故、こんな仕事をしている？」

そう言われて、シグレはしばらくの間、沈黙していた。

そして、彼は眼を泳がせながら、吐き出すように言う。

「八歳になる娘とな。女房が、ミソギ傘下のマフィアに殺されちまってな。俺はミソギを憎んでいる。だから、運び屋の仕事をしているとな。奴らに近付けるんだって思ってさ」

「……復讐者ばかりだな。俺もだ」

「そうか。支配者、やはりお前も復讐者か」

「ああ、俺はマザコンでな。……俺は、俺の父親を知らない。母親が収容施設で凌辱され続けて生まれた子供、それが俺だからだ」

しばらくの間、二人は黙っていた。

ふいに、シグレの方が取りとめもない事を話す。

「そう言えばな、知っているか？ 砂漠の狂信者集団は正義の聖戦の為に戦っているらしいぜ」

シグレは奥歯を噛み締める。

「奴らは幼女を性奴隷にしているそうだ。……俺の娘と重なるんだ。誕生日まで、一カ月を切っていた。俺に似ず、優等生だった。畜生……っ」

シグレは缶ビールを握り潰す、泡と黄土の液体が飛び散っていく。

「ミソギを一緒に殺さないか？」

灰色の空から雨が、ぽつり、ぽつりと振り続ける。

十

「一体、何を憎めばいいのか分からないんだろ？」

シグレは、ドミネートに訊ねる。

「ああ……、そうだよ」

彼は煙が消えても、煙草のフィルターをがりがりっ、と齧り続けていた。

そして、モヒカン刈りの大男は、二本目の煙草に火を点ける。

「ダーク・ヒーロー気取りか？」

シグレは、武器使いに訊ねた。

「そうかもな……」

「この世界は腐っているな。ドブ水の臭いがする、そうだろ？」

「お前だって、同じようなもんだろ？」

モヒカン頭は少しの間、眼が泳いでいた。

そして、吐き捨てるように言う。

「俺がさばいたのは、薬物までだな。人身売買をやっている連中もいる。俺達運び屋は、マフィアや武器商人のケツ舐めて生きているんだ。クソにたかる蠅みたいな職業だ」

「同じようなもんだ。お前のビジネスのせいで、人生を壊された奴らもいるんじゃないのか？ ゴミに集るゴキブリが、クソに集る蠅を蔑んでどうする？」

「違いはない、……、シグレは乾いた笑いを吐き出す。

「でもな、……。結局の処、俺は平凡な人間だったってわけだ。ドブの底まで落ちる事さえ出来なかった。人間としての大切な何かを捨てなければ、きっと先には進めない。そう思ったんだ」

シグレは近くにあったポリバケツを蹴り飛ばす。中から、生ゴミの袋が破けて飛び散った。悪臭が鼻を付く。蠅が飛んでいった。

「そう、世界はゴミの島で、みんな残飯に集るウジみたいなもんだ。

何処もかしこも、汚れて腐った利潤で動いている。

なら、自分が支配し、暴力を行使する側になるしかない。

「俺は俺の母親の恨みの為に戦っている。この世界とな」

ドミネートは勢いよく、ナイフを投げる。

二人を監視していた警察官の頭部に、見事に命中する。

この街の警官はマフィアと金で繋がっている。薬物の流通に手を貸している。何が市民を守る正義の味方だ、と思う。

「なら、力こそが正義だ。」

十

「俺には失うモノが無い。奴を狙えば、俺は世界中の武器商人を敵に回してしまうかもしれない……」

シグレは吐き捨てるように言う。

ナイフ使いは、冷たく笑った。

「お前の依頼受けよう。金は……」

シグレは金額を言う。……相場よりも、少しだけ多い。ドミネートは頷く。何も問題が無い。
ドミネートはシグレの依頼を受ける事になった。
ミソギを殺す事。
勿論、暗殺だ。

十

「情報屋によると、あそこでミソギが会食しているそうだね」

シグレが怒りの感情を露にする。

今にも自殺行為にでも出そうな表情をしていた。

そこは熱帯の高級料理を出す店だった。

店の中には、主張のし過ぎもせず、しかし巧みな配置で工芸品などが置かれていた。

「黒服のガードマンが何名もいる。突入するか？」

ドミネートは訊ねる。

「あそこは各国の武器商人の会談場になっている。俺はミソギを殺せばいい」

モヒカン頭は答える。

「邪魔するなら、他の奴らの命も落としておいてやるよ」

ドミネートはナイフを手にする。

いつものように、呼吸を整える。

時間まではまだだ。ミソギが出てきてからだ。

彼が店の中から出てくるまで、此处で待機を続けなければならない。中には沢山のガードマンと能力者が控えているだろう。それにミソギ自身、手練だと聞いている。

ドミネートは、それでも勝つつもりでいた。

彼を殺す事によって、自分がどのような立場に立たされるかも考慮しながら、暗殺に成功しなければならない。そう、誰が殺したのかを悟らせてはいけない。

あわよくば、敵対勢力からの攻撃の捏造、それが出来ないかと彼が考えている最中だった。

それは突然の出来事だった。

ナイフが、店の扉へと突き刺さる。

それに気づき、そこで待機していたボディー・ガード四名が一斉に、懐から拳銃を取り出す。

ドミネートは眉を顰める。

「おい、シグレ」

「ああ」

大男は両の拳を強く握り締めていた。

「別の奴らが、この会食に襲撃を仕掛けている」

「どうする？」

「いい事だ。かく乱されている間に、俺達が奇襲で始末出来る確率を上げられる」

気付けば。

ガードマンのうち、既に二人がナイフによって頭を撃ち抜かれていた。

二人の攻撃じゃない。

ドミネートとシグレの二人は。

壁を蹴りながら、ビルへとよじ登って、襲撃者を確認する。

それは、三名組の子供だった。十代に満たない男の子、十五歳前後の少女、それから十八歳前後の少年。

「ガキだ、どうする？」

「決まっている」

ドミネートは冷淡に告げる。

「囧になって貰う。彼らが全滅した頃に、俺達が襲撃しよう」

それを聞いて、シグレは言葉を失っていた。

「どうした？ 武器商人を殺すんだろう？」

十

「それで今回の案件なんだが」

ミソギは企画書の入った封筒と、フロッピーを男に渡す。

「B国とM国、それからxxx共和国に銃器、爆弾、ミサイル一式を流す。M国の方は原子力プラントを開発したがつているようだ。xxx共和国も核兵器を持ちたがつている。フロッピーの中には設計図も入っている。資金源が出来たら、連絡を入れてくれ。必要な分は俺の部下が渡す」

死の商人は、無感情な声で商品説明を行っていく。

初老の男は封筒とフロッピーを受け取る。

今後、幾つかの国が戦争やテロに巻き込まれるだろう。だが、彼らにとっては資源確保の為のリソースにしか過ぎない。

「まあ、乾杯しよう」

ミソギは煙草に火を付ける。

そして、白い錠剤を口に入れる。

初老の男は、錠剤を見て、すぐに気付いた。

「ミソギ様、それは.....不純物ドラッグでは.....？」

「.....流石に、眼がいいな。昔の癖が抜けなくてな。俺は良質な薬物ではキメられない」

初老の男はしばしの間、言葉を失っていた。

「.....、人体に悪影響を与えない良質な薬物ならいくらでもあります。お言葉ですが、ミソギ様、それを摂取し続けていけば.....」

「廃人になるのに時間が掛からない。ビジネスにも支障をきたすな。だが大丈夫だ。俺なら、何も問題無い」

それ以上、彼は有無を言わせなかった。

しばらくして、料理が運ばれてくる。

初老の男に、二名の男女が立っていた。

男の方は、浅黒い肌で髪を編み込みにしていた。女の方は真っ黒な髪に、感情の灯らない瞳をしていた。

「彼らは？」

「カサンドラ様の配下です。ミソギ様のガードをするようにと」

「必要無い」

突如。

外で銃撃戦の音がする。

動乱の中、ミソギは半ば無関心でいるみたいだった。

「くせ者ですっ！」

黒服の一人が叫んだ。

彼の白いワイシャツには、彼のものでは無い誰かの血が染み付いていた。

「ふん」

ミソギは二錠目の錠剤を口にして、煙草に火を点ける。

十

ボディー・ガード達は、次々に頭にナイフを撃ち込まれて倒れていく。

そのナイフ投げは巧みに訓練されたものだった。

巨体の男が現れて、投げられたナイフを受け止め、ナイフを投げ続ける少年を腕力で殺そうとする。しかし……。

十五歳くらいの少女が現れて、大男の背中に、手斧が振り下ろされる。

大男が肩に刺さった斧を引き抜いて、怒り狂った形相で少年と少女に掴みかかろうとする。だが……。

物陰から、銃弾が撃ち込まれて、大男の頭が吹っ飛ぶ。

十

「苦戦しているみたいだが、俺が出向こうか？」

「……我々にも面子があります。ミソギ様、御本人自ら赴くのは……」

初老の男の背後にいた男女二人が動き出す。

彼らは黒い礼服を脱ぎ捨て、すぐに防弾チョッキ入りの軍服に着替える。

彼らの瞳には、強いプロ意識のようなものが燃え上がっていた。

「我々が始末してきます」

男の方が言った。

それを聞いて、武器商人は気だるそうな顔をする。

「面子だか、知らんが」

ミソギは三本目の煙草に火を点ける。そして、出された海産物入りのヌードルに箸を付けていた。

「そう言えば、俺は護衛として“眠らせる者”を連れてきた。俺の“会社”の屈指の実働部隊に所属する者の一人だ」

武器商人を護衛していた者達は明らかに困った顔をする。

「おい、お前達の名前は？」

ミソギは、カサンドラの配下である、男女二人組に誰何する。

「デューズと申します」

「アゴニーです」

男女は恭しく彼の顔色を窺う。

「そうか。外に出るのは止めておけ。巻き添えを食らうぞ」

十

まず、最初に頭と胸を吹っ飛ばされたのは、遠距離からガード達を狙撃していた少年だった。

ミソギとガードマン達は不測の事態を予測している。周知の事だ。

シグレは双眼鏡を手にしながら、会食の店を離れていた。

「助けたかったか？」

ドミネートは彼に訊ねる。

「……………っ」

「俺達が助ければ、お前が死んでいた。彼らも戦場に立つ以上は仕方が無かった。残りの連中は助けようとしてみるか？」

「駄目だ。……………、敵の能力の正体が分からない……………」

「そういう事だ」

ドミネートは強い口調で言った。

「助けるぜ」

シグレは溜まらず、双眼鏡を落とす。

「俺の能力『ペアレント』で……………っ！」

「駄目だ」

ドミネートは強い口調で言った。

「お前の能力は射程に制限がある。もう少し近付かないといけない。敵の射程が分からない。それから、何処から攻撃しているのか分からない」

少女の頭が吹き飛ばされる。

シグレは地面に拳を叩き付ける。

ドミネートは双眼鏡を手にして、死体を観察する。

……………銃創？

確かに硝煙の臭いがする。

ドミネートは、空の辺りに双眼鏡を向ける。

すると。

空に、いつの間にか、黒塗りのガンシップが浮かんでいた。

「何だと？ 戦闘ヘリ？ いつの間に……？」

ナイフ投げの少年の頭が、ヘリからの弾丸によって破壊される。

まるで獰猛な捕食者のように、その攻撃は行われていた。

生き残ったガードマン達は、絶句しながら、店の中へと入っていく。

巻き込まれたくないのと、襲撃を受けた事の二つの恐怖が彼らの顔には浮かんでいた。

ガンシップは。

更に、空からの狙撃を続けていた。

辺りに隠れていた、銃や刃物などで武装した少年少女達の頭を吹き飛ばしていく。

一方的な虐殺へと変わっていった。

十

「まあ、彼は標的を外さないが、お前らがいると、邪魔になるからな」

ミソギは、出された料理をあらかじめ食べ終えていた。

ウェイターが、彼の皿を運び終える。

中に、ナイフ投げの少年が連れてこられる。頭が激しく損壊していた。

「まだ生きていたのか。運が悪いな」

死の商人は、虚ろな瞳でその光景を眺めていた。

十にも満たない少年は、ミソギの顔に唾を吐こうとするが、その気力も無いみたいだった。彼は頭蓋が破壊され、脳が露出していた。

ミソギは地面に腰を下ろし、少年の額に触れる。

「ふーむ、お前は少年兵上がりだな。……俺もそうだ。どうだ、地獄は楽しかったか？」

少年は、ただただ、死へと向かっていた。

「俺の部下はヒットさせるのは上手いが、加減が分からないからな。間違えて、無駄に苦しませる結果になったのは悪かったな。ちゃんと標的は一撃で殺せ、って強く言っておくよ」

少年は絶叫を続けていた。

ミソギは煙草に火を点けて、少年の口にくわえさせる。少年の頭部から、激しく出血する。

「吸わせてやりたいんだがな。ああ、誰か高級酒でも持ってきてやれ。彼に飲ませよう」

ウェイターが、彼に酒瓶を渡す。上等なブランデーだった。

ミソギは渡されたブランデーを開いて、少年の顔に注いでいく。

そして。

ミソギは立ち上がり、少年の頭を勢いよく踏み砕く。頭蓋骨と脳が潰れる音が、店の中に響いた。

他の者達は、息を飲む。

「さて。食事も終わったし、俺はもう帰るぞ」

ミソギは倦怠そうな声で告げた。

十

「おい、ミソギが出てきて、車に乗ろうとしているぞ」

「ああ」

空からの狙撃がまるで、天空からの粛清のようにさえ思えた。

「本命を追った方がいいな」

ガンシップは空を旋回していた。

そして。

物陰に隠れている少年少女達を撃ち殺し続ける。

シグレは。

彼らの何名かの下へと向かっているみたいだった。

「……、おい、ミソギの車を追った方がいいぞ」

「分かっている、分かっているがよっ！」

巨体の男は、必死で、自らを自制しようとしているみたいだった。

シグレは見えない腕によって、少年達のうち、四名を保護する。

「お、お前はっ！」

少年の一人が叫ぶ。

シグレは口元に指を立てる。

動転していた少年は、どうにか落ち着いたみたいだった。

しばらくすると。

一通り、店に襲撃しようとしていた少年少女達を殺し尽くすと、ガンシップはミソギの乗る車へと向かっていった。

十

「ルザックが先手を切って……っ！」

「あのナイフ使いのガキか……」

「あいつはいつも俺達を守ってくれた……。いつも先頭だった……」

結局の処、二人は次々と残った少年達を半ば強引に助けていった。

保護した少年達は、みな口々に嘆き声を上げていた。

「お前らは何者だ？」

少年の一人が、自分達は祖国から逃げてきた難民だという事を告げた。そして、復讐の為に、あの店にいる者達を殺そうとした事を告げた。

ドミネートは鼻を鳴らす。

「気配の消し方が下手だ。だから見つかった」

ドミネートは強く言う。

怒鳴るわけでも、大声で語り掛けるわけでもなく、無感情な声で、淡々と、低く、彼らを相手に話し続ける。

「生き残りたかったら、学ぶ事だな。“自らの命を友人よりも優先させる事”をな」

ドミネートは、意味深に、少年に言う。

「僕は……、僕達は奴らを、最後の一人になっても……」

「違うな。仲間意識を優先させるな。冷血になれ。復讐を果たしたければ、冷酷さが必要だ。仲間達に対するな」

ドミネートは辛辣な事を告げていく。

「お前、殺し屋にとって、一番、必要なスキルは何だと思う？」

「標的の心臓にナイフや銃弾を刺せる力だよ。僕達はその技術が足りないから」

「それもあるがな……、何より大切なのは」

暗殺者は、とてつもなく、まるで冷風のように、笑った。

「金勘定と逃げ足だ」

ドミネートは断言する。

「少なくとも、俺はそう考えている。引き際をどう見極める事が出来るか？ だ。得られる金とリスク、それは等価なのか？ などな。極めて重要だ。依頼人は大抵、複数の殺し屋を雇う。連携プレーをする場合もある。チーム・プレイで勝率を上げる事も出来る。だが、それよりも重要なのは、生き残る事だ。生き残ればチャンスはある。それを前提に勝算を考えるべきだ。利益との等価性を考えていけば、割に合うか、合わないかを考えていけば、自ずと、標的の命に迫れる」

「……そういうもの、なんですか……………」

「自分は死なない。相手だけが死ぬ、っていう状況を作る事だ。それをお前らは何だ？ 敵陣のド真ん中に幼稚な装備で突入していった。本当にそれで勝利出来ると思ったのか？ まず、計算すべきだ。単純な算数だ。自分達が全滅する確率と、相手側を殺し切れる確率。自分達側の被害。数字を頭に叩き込んでおかなければ、お前らじゃ殺し屋に向かない」

少年兵は、奥歯を握り締めて、拳を地面に叩き付ける。

そして、その後、ドミネートの顔を睨み付ける。

長い黒髪の男は、無表情のまま少年の顔を眺めていた。

「俺達もミソギの心臓が欲しい。だからお前達を俺達の仲間に入れても構わない。せいぜい、足を引っ張らない事だな。……瀕死に出来たら、トドメ位は刺させてやるよ」

十

「ミソギ達、死の商人は表向きは別のシゴトをしている。車や電子機器などのメーカーをしていたりする」

シグレはハンドルを握りながら、少年達に話し掛けていた。

ドミネートは、それを見て、少しだけ苛立たしげに思う。……余り、情を抱いてはいけない。シグレの車に乗ったのは、三名だった。

ドミネートが、少年達の中から、使えそうな相手を選別したみたいだった。少年達は困惑していた。

「あの、僕でいいんですか？」

少年の一人が言った。体格が小さく、腕も細身だった。

「プライドの高そうな奴、下手に格闘技術のありそうな奴は残って貰った。余計な事をしかねないからな。お前らはグループの中で、貧相だったから選んだ。グループのリーダー格などは余計な自尊心で俺のビジネスを乱しそうだ」

「その、あたし達は……」

三人の中、一人は少女だった。

「そう、始末するまでの傍観者をやって貰う。それだけだ」

ドミネートは有無を言わせなかった。どう考えても、少年兵達は二人にとって足手まといだった。

夜の闇の中だった。

高速道路だ。

夜景が綺麗に映える。

「ドミネート。『ハイド・ブリッジ』を通るぞ」

「ああ……」

ドミネートの顔が険しくなる。

「しくじるなよ」

ドミネートは強く言った。

五名の乗った車は、空を走っていた。

夜の空だ。

空を走っていたのは、一分にも満たない時間で、その後は暗い海の上を走り続けていた。

車が走っている道は、特殊な場所だった。

透明な吊り橋の上を、車で渡っているのだ。

元々、この吊り橋はレーシング・カーなどの、スポーツの一環として創られたものだったが、この街では、マフィアの運送屋が黒塗りの車で薬物や銃器、移民などを運ぶ為に建設させたものだった。

……ミソギの向かう場所は、おそらくは彼の泊まっているホテルだ。そこから先回りして、襲撃する。

それが二人のプランだった。

ハイド・ブリッジは色々な場所にあるが、この場所を利用する者は少ない。此処は、ガードレールを作らずに、運転を間違えれば、簡単に海の底へと沈んでしまうような造りになっている。

だから、本当の意味での裏のルートだった。

海上、3000メートルのうねる透明な道を、シグレは走らせていたのだった。

「もし、彼が運転をミスれば、俺と彼くらいは助かるだろうが。お前達は無理かもしれないな」
ドミネートは、冷たく少年達に言い放つ。

「なあ、シグレ」

「ああ」

「狩る者は俺達の筈だったが」

「此処は格好のポイントだな」

ドミネートは窓を開ける。

空を眺める。すると。

黒塗りのガンシップが空に浮かんでいた。

「天の狂王……っ！」

少年の一人が叫ぶ。

「シグレ、ハンドル操作を誤るなよ」

「ああ……」

ガンシップは五人の乗る車を無視して、橋の先へと向かっていった。

「まずい、まずいぞ……」

シグレは焦る。

「いざとなれば、車を捨てて、泳いで逃げるか？ 後、数百メートルで向こう岸に付く。ガキでも充分、泳げる距離だ」

「お前の損害は？」

ドミネートは淡白な顔で訊ねた。

「かなりデカイ。積み荷が入っている。大損だ」

もうすぐ、橋が終わろうとしていた。

橋の先に。

ナパーム弾を投下される。

炎が燃え上がっていく。

威嚇無しだ。使ってくる武器を考えると、何の容赦もするつもりも無いのだろう。

炎の中へと。

シグレは車を突っ込ませていく。

岸の辺りは、炎の海によって包まれていた。

シグレの車は、空高く舞い上がっていた。彼の能力ペアレントが、車体を丸ごと放り投げていたのだった。

ペアレントの空気の腕が、クッションになって落下する車体を支えた。

「逃げ切れるかな？」

ドミネートは呟く。

「いや、倒すか？」

シグレは訊ねる。

「俺はどっちでもいい」

「天の狂王はしつこいらしいぞ。完全にマークされた」

「倉庫街だ。身を隠そう」

「あのガンシップ。やはり倒すか？」

ドミネートは少しだけ、冷や汗を流す。

「消耗する可能性が非常に高い。奴を倒した後に、ミソギを殺せる確率は限りなく低いぞ。此方の損害が分からない」

シグレは忌々しそうに言った。

「そのまま、ミソギを殺しに行く。ガンシップは無視しよう」

十

あの瞬間に感じた記憶とか、受けた洗礼だとか。

ミソギはあの味を忘れない。

ゲロのような男の体液。

それが、仕事の途中、プライベートに、突如として襲いかかってくる。

押し付けられるという事、命の在り方を押し付けられるという事。

世界はゲロなのだと感じた。

嘔吐物を満たした、残飯の詰まったバケツなのだと考えた。

そして、残飯を喰らうのは、やがてハエになるウジ共だ。

どんな時にでも、突発的に、脳の中を記憶がフラッシュバックして蘇る。自分を凌辱した者達の顔が、行為の味が。だが、ミソギはそれを表情に出さない。極めてクールにポーカー・フェイスを続ける。だが、彼は凍えるような寒さの中にいた。シャブやシンナーのような、最低レベルの薬物で脳を溶かさないと仕事が出来ない。それくらいの、破裂しそうな状況が、もう何十年も続いている。けれども、彼は未だ生きていたし、更に頂点の辺りへと昇り詰めていた。それは情念から来るものなのか、果ての無い虚無から来るものなのか、彼自身にさえも分からなかった……。

十

ドミネートは思う。

母親は自分の事を愛しているが、自分には父親がいない。

輪姦の際に、生まれた子供が自分。

何故、母親が自分の事を愛してくれているのか分からない。

大切な、この世界に落とされた命だと思ったからなのか？

自分は何の為に生まれたのか。

ドミネートは未だ、自分の存在の理由が分からない。

自分の心の片方が欠損してしまっているように思える。

もしかすると、それはもっとずっと昔に取り戻したかったものなのかもしれない。

自分の存在は、血と暴力の恩寵なのだ。

それは自分が生きている限り、押し掛かる事実だ。母親は、自分には罪は無いと言った。

なら、何故、自分は迫害されて生きていけないといけないのだ？

誰かの権利を奪う事でしか、この社会は存続していない。

自分も奪われる側から、奪う側を目指そうと思った。

それこそが、この世界の摂理なのだ。

行き詰まって死んでいく者達に、何も感じないようにした。

十

無力な少年達と自分を重ねないようにしている。

もし、彼らの心情に肩入れすれば、自分が死ぬ確率が上がるだけだ。

ドミネートは思う、自分は何の為に戦っているのか、と。

復讐なのだろうか？

母親の為に？

おそらく、知りたいのは、この世界の道理なのだろう。

もう一人の自分が囁き掛ける、もう何もかも諦めてしまえ、と。

自分の力は、この世界一つを踏み躪れる程、強いものなんかじゃない。

十

何故、犠牲になる者がいる？

シンプルな疑問だった。

ミソギ達が殺すのは法律によって、正当化されて、社会のルールの中で殺人犯が殺す事は良しとしない。

武器商人達は、企業の陰に隠れている。

彼らは合法的に人を殺している。

なら、自分達でルールを設けるしかないと思った。当然の帰結だった。

誰かを犠牲にする事でしか、自分の生きる権利は手に入らないのだ。ならば、自分が下手を打たない事、犠牲にならない事、それだけがこの世界の真実なのだ。

誰もが既得権益にしがみ付きたがる、それは生きる権利そのものだ。権力そのものなのだ。自分の母親がそうであるように、母から生まれた自分という存在がそうであるように、ドミネートは、この世界は生きる権利を与えられなかった。

きっと。

ミソギもそうなのだろう。

そして、彼の方が自分よりも醜悪な者達を見て、汚れに落とされて生きてきたのだろう。……だからこそ、決して同情などしない。

十

「隠れている」

ドミネートは車を出る。

「俺が始末する。この俺がな」

金属の塊で、空気を裂く音が鳴る。

ドミネートは懐からナイフを取り出していた。

「天の狂王か。俺が命を終わらせてやる」

彼の瞳は、強い敵意に満ちていた。

「シグレ、ガキ共は任せたぞ」

「ああ、俺の力は“護る者”だ。俺の誇りにかけて、こいつらは護ってみせる」

黒いガンシップを、ドミネートは追っていた。

ドミネートは壁にナイフを突き立てて、ナイフを足場に跳躍していく。

ガンシップに、ナイフを突き立てる事は出来る筈だ。

黒い空の船から、砲撃が行われる。

ガトリング・ガンの弾丸は、ドミネートを襲う。倉庫の一つが孔だらけになる。

……やはり、こいつは素人じゃない。余計な動きはしない。

あのガンシップは、有名なミソギの部下だ。

中で操縦している者の正体を、ドミネートは知らない。

天の狂王の素性を知る者などいない。きっと、ミソギぐらいだろう。

ガンシップは、空の定位置に止まっていた。

まるで、カエルやマウスを飲み込もうとする蛇のように見えた。

……さてと、この俺の方から攻めさせて貰うぜ。

彼は二つのナイフをしばらく構える。すると。

ナイフの柄が伸びていき、ナイフの柄同士が結合する。

それは一本の長い棒になった。

そして、彼はもう二つナイフを取り出して、同じように結合させる。それは、長い槍になった。

最初に作った長い棒から、硬くて太い糸が突き出した。

四つのナイフは、弓矢へと変わった。

ドミネートの力は『変形武器』だった。

……俺の能力『クリプト・シー』は、武器を様々な形に変形させる事が出来る。

彼は弓の弦を引き絞り、矢をガンシップへと飛ばす。

ガンシップは、難なく、機体を機動させて、矢を避ける。ドミネートは次々と二つのナイフを

取り出した後、結合させて矢を創り出していく。

ガンシップは、それらを次々と避けていく。

……、ふん、やってろ。

投げた矢が空中で、バラバラになる。

そして。

それらは黒いワイヤーで編んだ投網へと変わっていた。

ガンシップに、網が覆い被さっていく。

機体から小機関銃が出て、網に撃ち込まれていく。

返す刀で。

ガンシップから、ガトリング・ガンの弾が、ドミネートへ向けて放たれていく。

「クソ、駄目か」

彼は声に出して、苦渋の言葉を放っていた。

ドミネートが立っていた場所は、孔だらけになる。

……さてと、どうするかな。

ドミネートは敢えて、周りに物陰が無い場所へと向かう。

四方八方に、隠れる場所が無かった。

……さあ、この俺を撃ち殺しに来い。

ガンシップは上昇していく。

そして。

勢いよく、空へと上がっていく。

……まさか……………？

ガンシップは、そのまま、別の場所へと向かっていく。

「……ミソギの下へ向かうつもりか？」

なら、今度は此方から仕掛ける番だ。

十

「デューズとアゴニーがどうしても、と」

使用人の一人が、ミソギに告げる。

ミソギは葉巻を吸っていた。先端をがりがりっ、と、齧っていた。

「ああ、もうそれは天の狂王にも伝えてある。くせ者はあの二人に始末させる。カサンドラの面子もある事だしな」

「少年ゲリラ達の残党達はどうされますか？」

「放っておけ」

ミソギは葉巻に火を付ける。そしてパソコンを取り出して、次の交渉事に取り掛かっているみたいだった。

十

「子供は殺すな、らしい」

「あらあ？ 結構イイ奴じゃない。ねえ、ねえ、私やりたかったのになあ」

アゴニーはスーツから、軍服に着替えて、とてもはしゃいでいた。

そして、彼女は自らの得物である銃器を丹念に舌で舐める。

「射りたい、射りたい、射りたいのに」

「俺に言われてもなあ」

デュースは自らの武器である、細長い針金にチェックを入れていた。

それが彼の得物みたいだった。

「ねええ、デュース、デュース。あたしとヤラない？ ムラムラしてきちゃった！」

「ううん、俺はゲイだ。細い身体の金髪男にしか欲情しない」

それを聞いて、アゴニーはげらげらと笑っていた。彼女は酒もドラッグもやっていないのに、妙なテンションになっていた。

「あたしは子供とやりたかったなあ」

「なんだい、ペドファイルなのか？」

「うん！」

アゴニーはカラー・コンタクトを嵌めていく。

彼女はスナイパーだった。

とても嬉しそうな顔をしていた。

「俺はモヒカンを殺す。お前はナイフ使いだ」

二人は互いの健闘を祈り、それぞれ別行動を行う。

十

「天の狂王が去った。俺達を始末しようとする奴は別の者にするんだろうな」

ドミネートが告げた。

「ミソギ達が俺達を始末する事を諦めたわけじゃないのか？」

シグレがそう言って、ドミネートが、むっとした表情になる。

「……爪が甘いぞ。……、間違いない。あのガンシップは奴の側近だ。おそらくこれ以上、俺達に時間を取られたくないのだろう。だから追撃は別の奴を送り込んでくる筈だ」

ドミネートは苛立たしげに言う。

「俺は奴を追う。お前は陽動の為に逃げる。……慎重にだ。目立つように逃げるんだ。必ず、俺達に追撃を入れようとする奴が現れる。そういう戦略でいいな？」

「確証はあるのか？」

大男は首を傾げる。

「運び屋なら心当たりはあるだろう？」

そう言われ、シグレは頷き、何も言わなくなった。

製油生産工場の中だった。

シグレはこの中で敵を迎え撃つつもりていた。

ドミネートは、おそらく敵は二手で来るだろう、と言った。

……確かに何者かの気配を感じるぜ。俺達を追ってやがるのか？　しかし役に立たないガキ二人のお守りも任せやがって。

いや、ガキを引き受けたのは自分だ。そもそも、ドミネートは見捨てろ、と言った、だから、自分で全部、引き受けなければならない。

「あの……」

少年の一人がぼそぼそと話し出した。

「このままやられっぱなしは悔しいんです、どうか俺達にも手伝わせてください……」

「駄目だ」

少女が彼にしがみ付く。そして、泣きじゃくる。

大男は、困ったような顔をする。

「……………、分かった。トドメなら刺させてやる。やってやろうじゃねえか、ああ、やってやろう」

シグレは歯軋りしながら言った。

そして、小型の拳銃を少年の一人に渡す。

少年はしばらくそれを見ていたが、強い決意を宿したみたいだった。……戦力になれば申し分ないが……。現状、足手まといでしかない……。

シグレは、とにかく彼らが無傷で、敵を倒す事ばかりを考えていた。

しばらくの間、四名は敵の出方を待っていた。

鉄骨とフォークリフトから何かが光る。

シグレは跳躍する。

鉄骨が切断されて、地面に転がっていく。

……何だ？　何が来た？

無音だ。

シグレは背中から、ペアレントによって作られた蒸気の腕を一对作り出す。人間の頭部の倍以上もある腕だ。

これで、敵の頭を潰してやろうと思う。

無造作に置かれたドラム缶がバラバラに切り裂かれていく。

……何かで切り裂いてやがるのか、クソッ！

彼は少年達三名を、腕の一つで護っていく。

音も無く。

ドラム缶が次々と刻まれていく。幾つかは中身が入っており、石油が地面に流れていく。
何で攻撃しているのかを、早く見極めなければならない。でなければ、……殺される。
「一つ聞きますけどえ、えとお、何でわざわざ荷物を三つも背負っているんですかねえ？ 何処
かで捨ててこなかったんですかあ？」

声が工場中に響き渡る。

シグレは答えない。

「子供、銃持ってますけど。発砲してきたら、戦闘要員として、きっちり始末しますよ。知って
ました？ ガキ共はもう無視していい、っていう指令が下っているんですよ」

シグレは背中から、更に二本の腕を生やす。

一撃も、子供達に触れさせないつもりでいた。

「お前らを始末したいんだとさ。お前らのせいで家族を犠牲にされた奴らだよ」

「ああ、そうですか。俺は知りませんねえ、俺は諜報員だから」

それにしても、抑揚の無い声だった。

本当に、知った事では無いのだろう。シグレもそうだ。彼自身、ビジネスにおいて、他者の不幸に興味を持たないようにしてきた。ターゲットの人生なんてどうだっていい。それが当たり前なのだ。

「メンドーだから、この辺りに引火しようと思うんですけどねえ。僕が弁償する事になるんすかねえ？ ああ、上の人がもみ消してくれないかなあ」

シグレは冷や汗を流す。

辺り一面には石油がまき散らされている。

「不慮の事故って事でいいですよねええ。管理会社が悪かった。そういう事にしときますかあ」
無味乾燥とした声が響き渡る。

シグレは四つの腕のうち、一本の腕で子供三人をつかんだ後、出口へと向かう。

すると。

シグレの首に、何かが巻き付いていく事に気付く。

あっという間に。

シグレの首に細い何かが巻き付いて、彼を吊るし上げていく。

「ふふうう、まあ、こんなもんでしょ。終わりですね、と」

シグレの全身は、ゆらゆらと空中で揺れていた。

そして、数秒後。

髪を編み上げにしたスーツ姿の男が地面に着地する。

「さてと、うーん、どうですかあ？ おい、ガキ共、発砲しなければ見なかった事にする、ッスよう？ 後始末メンドーなんで」

「俺はガキじゃねえ、ポルカって名前がある！」

ポルカと名乗った貧相な身体の子供は銃口の引き金を引いた。

少年の腕に、何かが巻き付いていく。

それは、細く硬いワイヤーだった。

彼の使っている武器は、どうもワイヤーのようで、ワイヤーを物に巻き付かせて切り刻んでいるみたいだった。

「どうせ、命中するわけないスよお？ 無意味、無意味」

編み上げ髪の子はつまらなそうに言う。

「ちなみに、僕はデューズって名だよ、宜しくう」

彼は不敵に唇を歪めた。

「さあて、とお。あそこで吊られている、テルテル坊主の死体。どーしよかあ、一応、通信機に付属しているカメラ機能で取って、ミソギ様に送るかなあん」

ぱしゃ、ぱしゃ、っ、と、彼は写真を取っていく。

「さあてえ、と。どーせなら、あんたら、アゴニーの下に行くのもいいかもねえ。彼女は子供大好きだから。なんなら、おじさんが彼女の場所、教えてあげよっかなあ？ 彼女の方がミソギ様に近いかもよ？ その代わりに、あの美形の彼の弱点とか、何か知らない？ たとえば、何か弱い言葉があるとかさあ」

ワイヤー男は少女の頭を撫でていく。

「好みのタイプなんだよねえ、ああいうイケメンはねえ。ほら、俺、ストレートも好きだしさあ……………っ」

ぼぎょじゅり、と、デューズの首が回転する。

ぱたりっ、と、スーツの男は地面に倒れる。

シグレが、勢いよく呼吸する。

透明な腕が、彼の首をねじ曲げたのだった。

ワイヤーによって吊るされていたシグレが、地面へと着地する。

「ふう、死んだフリでかわせたけど。爪の甘い殺し屋だったな」

「おじさん……、あ、えっと、シグレさん、大丈夫なんですか？」

「ああ、まあな。ペアレントの腕を小さくして、気道の辺りに挟んでいたからな」

シグレは汗だくになりながら、咽び続けた後、深く呼吸を行う。

ドミネートの方も、上手く片付けてくれるだろうか……。

十

少年兵の残党達を、どの地点で捨てていくべきかを考えている処だった。その辺りは、シグレに任せればいい。彼にとっては、どうでも良い事だった。

ガンシップは此方を誘導している。

アレを落として、ミソギへの宣戦布告にするのもいい。

ドミネートは、ミソギが宿泊しているホテルへと向かっていた。情報はシグレから得たものだった。少年兵達も、ミソギの宿泊場所を教えてくれたが、シグレが入手したものとは別の場所だった。ドミネートはシグレの方を信用する事にした。

彼は路地裏を走っていた。

他の通行人に気付かれないように、自分が暗殺者なのだと知られないように、都会の陰を過ぎていた。

何者かが、自分を追っている。

ガンシップを追っている自分を追っている。それに気付いた。

.....ホテルxxまでは、この区画を通らなければならない。おそらくは正解だ。あのガンシップは、ホテルとは別ルートに着陸するつもりだな。

繁華街も通る事になった。

街を行く人々は、空に浮かんだガンシップに気付いていない。気付いていたとしても、それが人間を殺傷する兵器なのだと分からないのかもしれない。あるいはこの辺りは軍事施設が多い場所だ。何かの訓練に使っているのだろう、と、気に掛けないのかもしれない。

ドミネートは、自分を狙っている者を、どう始末するべきかを考えていた。

気配はつねに感じている。

張り付いている足音は同じだ。

あちらは、此方が気付いている、という事に、気付いているだろうか。

無論、それを前提にして、動かなければならない。

ドミネートは紙片を開く。街の地図だ。

シグレから教えられた場所が近付いてくる。

ホテルの目印は、近くに鉄塔がある事だった。

その鉄塔の反対側に、ミソギが泊まっているホテルが建っている。

ちゅん、と、ドミネートの横を弾丸がかすっていた。

ドミネートは振り返る。

.....馬鹿が。一撃をこの俺を仕留め損ねたな。

ドミネートは、後ろを振り返る。

どうやら、位置はビルの屋上の一つだ。

ドミネートはその場所に向かわずに。

壁へと命中した弾丸を探り当てる。

壁面の一部がひび割れて、確かにライフルの弾がめり込んでいた。

それを確認していた数秒後。

あらゆる方角から、ライフルの弾丸が、彼に向かって撃ち込まれてきた。

十

アゴニーは狙撃スコープを見ながら、嬉しそうに笑っていた。

彼女は明らかに性的興奮を引き起こしていた。

ライフルを愛撫しながら、陶醉した顔になる。

「うふふっ、うふふふふ、ドミネート。お前はアタシに挿れられるんだ。楽しいな、嬉しいな。イケメンだしね。あのゴツイ方をやらなくて済むんだから」

彼女はライフルを静かに舌で舐めて行く。

その後、ライフルの弾の一つを舌で愛撫していた。いつもならば、唾液が付いた弾は捨てなければならない。指紋を付けないように、つねに袋も嵌めているのだから。だが、今回、武器商人を護衛する際に、特殊な兵器を使う事にした。自分の痕跡を隠すのは、ずっとやりやすくなっている。

彼女はライフルに弾丸を装填していく。

引き金が引かれ。

あらゆる場所から、弾丸の発射音が響いた。

「くく、はは、はは、アタシが何処から撃っているか分からないに違いない」

スコープを見ながら、アゴニーは舌を打つ。

どうやら、一撃目は目標に当たらなかったみたいだった。ドミネートの上着が地面に落ちて、孔だらけになっている。ドミネート自体は見失ったみたいだ。

だが。

彼女はタブレット型の通信機を取り出す。

スクリーンには、あらゆる場所の映像が流される。

この辺り一帯の監視カメラに接続している。

ミソギの会食の場、宿泊ホテル、他にもこの街のあらゆる場所に部下を使って、監視カメラに設置させている。

再び、上着を失ったドミネートを補足する。

彼女は自らのライフルに弾を入れる、そして引き金を引く。

一斉に、ドミネートへと弾丸が撃ち込まれていく。

いつか、彼にかすり、血が飛び散っていくのが分かった。

「やった！ 傷を付けた。これで隠れて逃げるのが、随分、難しくなっていくよねっ！ 少しずつ、もっと少しずつ、優しく解きほぐしながら、ちゃんと頭に挿れてあげるんだから」

彼女は興奮し続けていた。

しかし……。

彼女は指先を動かし続けて、あらゆるカメラの映像を見ていた。

ドミネートの姿が見当たらない。

監視カメラの一台も壊されていない。

「あれ、おかしいな。隠れたの？ ミソギ様を殺すんじゃないかったの？ あのホテルに向かうには、数十台のカメラを潜らなければならぬわね。その時に私に狙撃される。ほら、さっさと出てきたらどう？」

アゴニーは少しだけ、イライラした顔になる。

「ねえ、さっさと……」

しゅん、と、何か、風のようなものが、アゴニーの首筋を通り過ぎる。

振り向くと、一人の男が背後に立っていた。

「弾丸を撃ち込んでこない位置。それがお前の居場所なんじゃないか、って思った。まず、あら

ゆる場所に、無人で発射出来るようなライフルが仕掛けられていたな。壊そうとすれば、自動的に爆弾が爆発するような工作をされてな」

それは赤い液体で光っているナイフだった。

ドミネートは、それを握り締めている。

「俺のナイフを幾つも防弾チョッキに使わせやがって、しかし、その変なオモチャ。よく出来ているよな。弾を入れて、引き金を引くと、全てのライフルから発射されるのか？」

黒く、長い髪の男は、まじまじと興味深そうに、使用すると信号を発する弾丸を眺めていた。

アゴニーの首は、胴体からズリ落ちていく。

彼女の意識は、首が落下して地面に落ちる前に失っていた。

彼のナイフの一太刀によって、彼女の首は一瞬にして、一刀両断されたのだった。

2

ガンシップから降りたのは、フェイスマスクで顔を隠した男だった。両眼と口のみを露出させている。彼が天の狂王と呼ばれる者だった。彼の素性は殆どの者が知らない、彼の素顔も一部の者達にしか知られていない。

二人は、数名の使用人に囲まれながら、高級ホテルの中でくつろいでいた。

「狂王、お前も一本やるか？」

ミソギはシガレットを差し出す。

「駄目ですな。私は薬物はやらない。狙撃に支障を来たしますし、ミソギ様、何故、そんな破滅的なドラッグをお使いになられるのですか？ 貴方様程の者が、メタフェタミン入りの薬物を使うとは冗談にも思えませんよ」

「昔の癖でな。これを使っていると、自分が自分でいられるようになる。上物の酒も女も駄目だ。俺はこれで育った、言わば故郷の味だ」

「常人ならば、とっくの昔に廃人になっていますよ」

マスクの男は露出した口に、ワインを注ぎ込む。

彼はミソギにさえ、自らの顔を晒すのを避ける。

狂王の正体は、殆どの者が知らない。

彼は周りに、自身の素性など明かしたくないのだろう。

「先程、頭を砕いた少年兵の事が気がりですか？」

「余計な詮索はするべきではないな」

ミソギは厳しく告げる。

「お前には俺の“最高のレシピ”が与えられている。せいぜい、空を制覇してくれ」

ミソギはパソコンを開き、次のビジネスに移っているみたいだった。

どうやら、別の武器商人との取引みたいだった。

「マガイの売る武器は毒薬だ。奴は毒物を流して、古典的な貴族のように人を殺させる。あれは意外に金になるらしい。興味深いものだ」

ミソギはワインを呷る。

戦闘機乗りは立ったまま、彼を見ていた。

「俺は世界中が戦争状態になる事を望んでいるよ。そうすれば、俺は武器を売れる。俺の“会社”は儲かるんだよ。俺は金が欲しい。際限の無い程に金が欲しい。金はあればある程いい、武器を製造する工場を増やせるからな」

「ふふっ、怖ろしい御人だ」

狂王は腕を組む。

「別に戦争じゃなくてもいいさ。大災害だろうが構わない。民族差別だってな。テロやレジスタンスに走る革命家共が増えたって構わない。俺は誰にだって武器を売るさ。たとえ、この俺を殺したい奴にだって売ってやる。相応の金を払ってくれるのならな」

狂王は、主人の底の無い、生の空しさを感じ取っていた。それは彼の生い立ちにある。

「ミソギ様、貴方にとって、武器とは何なんですか？」

彼の片腕は訊ねる。

「神様だ」

「では、金は？」

「資源だよ。更に武器を作る為のな。とても大切なモノだ。もっとも、取り引き相手の金融業者は、金が神様、武器はタダの資源だって言っているがな。紙幣を祭壇に飾ってやがるそうだが、傑作だろ」

彼は低く、声を出して笑っていた。

ミソギの部下の一人である黒服が通信機を片手に入ってくる。

「どうした？」

「デュースとアゴニーの二人が死亡したみたいです。敵は間違いなく、此方に向かっている」

はあっ、と、ミソギは大きく息を吐いた。麻薬の煙が充満する。

「カサンドラの面子があるから、使ってやってみればこれだ……。まあいい。……。どうする？俺が直々に出向くか？」

ミソギの片腕とも言える、狂王が声を上げようとして、ミソギが彼の前に手を伸ばした。

「お前は此処にいて、俺の武器と金を守れ。俺の命よりも大切なモノだ。“ティガー”を動かす。奴で駄目なら、やはり俺が出る」

十

ドミネートは、物陰に隠れていた。

彼はシグレの到着を待っていた。

上手く敵を始末してくれると助かるのだが……。

「捕捉しているぜえ、お前らが何処に隠れているか何てな」

ホテルの中から、一人の大柄の男が出てくる。シグレよりも、一回りも二回りも巨体の男だ。軍人崩れだろうか。それにしては、頭が悪そうだ。

「俺はティガー・ボルト。何処にいるか分かるんだよ、お前らがどんなに気配を殺していてもな」

ドミネートはふうっ、と、溜め息を吐くと、大人しく、大柄の男の前に姿を現す。

黄色い軍服のズボンの上に、緑色のタンクトップ。野生的な顔立ちの男だった。背中には背嚢を背負っていた。

「お前は何だ？」

ドミネートはナイフを手にして訊ねる。

「俺は武器商人ミソギ傘下の虎男だ。陸の制覇者だ。俺は戦車の一個大隊より強いぜ？」

ドミネートは。

問答無用で、大男に向かってナイフを投げ付ける。

大男は、ぱしりっ、と、ナイフを鷲掴みにして、ドミネートに向かって投げ返す。

「んんっ？」

ティガー・ボルトと名乗った男の腕には、鎖のようなものが巻き付いていた。投げたナイフが、ブーメランのように、そのまま大男の顔面に向かって飛んでいく。大男は大きく息を吐く。すると、ナイフの軌道がそれて、別の場所へと向かっていく。

ドミネートは、この敵の行動に、少し呆れながら、冷や汗を流す。

「俺の変形武器『クリプト・シー』はこんなものじゃないぞ？」

絡み付いた鎖から、トゲが幾つも生え出して、大男の皮膚を裂こうとする。ティガーは即座に、巻き付いた鎖から逃れる。どうやら、瞬時に関節を外して、すぐに関節を戻したみたいだった。

「俺の力を見せ付けてやるぜっ！」

「やかましい。何か出す前に始末してやる」

鎖はいつの間にか、長い棒へと変わっていた。ドミネートは最初に投げたナイフの一本を、何度も変形させて、ティガーを攻撃し続けていた。

長い棒は、槍へと変わる。

ドミネートは長い槍を振り回す。

これで、敵を貫き、倒すつもりでいた。

ティガーは背中の背嚢を地面に落として、中の物を両手に嵌めていた。

それは、肉食獣のようなカギ爪だった。

がきりっ、と。

カギ爪が、ドミネートの槍を受け止める。

「それで、この俺様を殺せると思っていたのかよ？ 何もさせずに？ 本番はこれからだぜっ！

ショー・タイムだっ！」

「雑魚っぽい言い回しだな」

ドミネートが鼻で笑う。ティガーは眉をひく付かせる。

カギ爪の爪の一つが、弾丸のようにドミネートの顔面へ向けて発射される。ドミネートは、それを首をひねってかわす。

二人の背後で、大爆発が起きて、瓦礫の飛沫が飛び散っていく。

「お前……、本当に馬鹿だろ……？」

ドミネートは、呆れて、口を引き攣らせていた。

「ははあっ！ この俺様の爪の一本、一本は小型ミサイルになっているんだよっ！ 元々は、ミソギ様がビジネスに使う為の商品だがな。小型化に成功しやがったのさ。ゆくゆくは各地のゲリラ共が応用して使うようになるぜっ！」

ドミネートは、もし、自分に命中していれば、彼はどうやって爆撃に巻き込まれる事を、防いだのだろうか？ と、疑問に思っていた。

「ふん。そんな企業機密を敵に漏らすとは無能の極みだな」

ドミネートはますます、呆れ顔になっていく。

「俺の全身の皮膚の上に、透明な防護用の人工樹皮が張られているのは分かるか？ つまり、そういう事だぜ」

夜闇で見落としがちだったが、確かに男の髪から顔、それから腕や足、服の下には薄い膜のようなものが見えた。だが……。

馬鹿そうに見えるが、この男は覚悟出来ている人間なのだろう。人工樹皮とやらも、どれだけの強度があるのか分からない。防弾チョッキの強化版とどれだけ大差があるのか分からない。

こいつが、自分にとって脅威である事には変わらない。ドミネートは神経を研ぎ澄ませて、油断満身する事を止めた。

小型ミサイルが、もう一発、ドミネートへ向けて発射された。

彼はそれを避けた、背後から爆発音と衝撃が此方まで来ない。……。

「まさか……」

両手の爪、全てに爆発物を仕込んでいるわけではない、それによって此方の読みをねじ曲げようという作戦なのだろう。

いつの間にか、ティガールの両手には爪が再び装着されていた。

間髪いれずに。

再び、ドミネートの武器が鎖へと変形して、ティガールの首へと絡み付いた。

「ふん、そんなもの、引き千切ってやる」

鎖の先が、大きな鎌へと変形していく。

ずしゅりっ、と、ドミネートの胸元が引き裂かれる。

彼の胸から、鮮血が流れる。

「クソッ……、軽量の防弾チョッキを着ていたんだが。役に立たなかったな」

ドミネートはコートを脱ぎ捨てた。

がりがりっ、と、大鎌が、ティガールの首を落とそうとする、首回りの透明な樹皮を削り取っていく。鎖は今や、ティガールの首周りに巻き付いている部位以外は、強固な棒へと変わっていた。

ティガールの拳が、大地に触れる。

コンクリートの地面が砕かれていく。

「気付いているか？ ティガール・ボルト、俺はずっと一本のナイフを変形させて、お前と戦って

きた、分かるな？」

ドミネートはナイフを投げた。

背後のビルの屋上の辺りだった。ナイフは矢のような形状へと変形していく。

そして。

数秒だった。

数秒の間に、ドミネートはビルの屋上へ移動すると同時に、ティガーの首周りに大鎌を押し付けながら、彼の態勢を傾かせていた。屋上に着地した、ドミネートは更に、何本かのナイフを取り出して、ティガーの下へと投げ付けていく。彼の背負っていた背嚢を狙ったのだった。……爪はあの中に収納されていた。

鎖付きで、刺さったナイフは、巨大な鉄球へと変わっていた。鉄球から針が生えていく、背嚢の中身をズタズタにしていく。ティガーが、この強引な戦法に、そして、ドミネートの力の柔軟さ、強さに気付いたのは、手遅れだった……。

大男の背負っていたズックが光り輝くと。

爆破炎上していく。

ホテル周辺を巻き込み、周辺のビルの窓ガラスなどを割っていく事の爆発だった。この辺り一帯が、一つのクレーターへと変わっていた。

……あいつ、馬鹿だろ？

ドミネートは鼻を鳴らした。

十

外では戦闘音が聴こえてくる。

二人は、それを楽しんでいた。

他人の死も、自分も死も、極めて身近なものだった。

だからこそ、自分達や周辺の間人間の死が、人生の快樂の一部になっているのだ。

「路上のストリート・チルドレンから成り上がった、少年兵だったこの俺にとって、唯一の神様が拳銃だった。それが真実だった。俺を引き取ったペドファイルのクソジジイとクソババアを殺したのも、武器だった。かつての奴らの豪邸が爆弾で燃え上がる瞬間、俺は理解したんだ。ガキの頃、俺よりもガラクタ売りの稼ぎのいい友人の財産を奪ってやる為に俺は地雷原に誘い込んでやった。奴の顔は眼の前で吹き飛んだ。俺はその時に武器こそが、兵器こそが、大量破壊兵器こそが俺の神様なんだって気付いた」

「金儲けの為ではなく、武器の生産の為に金が欲しいのですか」

「ある一定の位置に行くまでは、金も大きな神様だったんだがな。……あらゆるゴミみたいな価値を踏み躪ってくれる兵器、それが金だったのだからな」

死の商人の言葉は、執念そのものだった。

その哲学こそが、彼の人生を支えているものだった。

「狂王、お前は何の為に生きている？ 何を信条として生きている？」

「私は国民の為に生きたいと思いましたよ」

彼は少しの間だけ、眼を閉じた。

ミソギは、それ以上の事を追求しない。

突如、強大な爆発音がした。

ホテルの防弾ガラスにヒビが生えて、一部が割れて、二人の下へとガラス片が降り注いでいく

。

魔王は来ていたコートを、瞬時に、ミソギに被せる。

ミソギの腹心は、自らの命よりも、主人の生を気遣う。

「お怪我は無いですか？ ……っ、それにしても、この安ホテルがっ！ 防弾ガラスを何重に出来なかったのか？ ミソギ様を危険な眼に合わせて……っ！」

「俺は怪我は無い、ティガーは敗北したようだな。それよりも、お前は？」

フェイスマスクを被った男の背中と、腕の辺りに細かいガラス片が刺さっていた。彼はそれを一つ一つ抜いていく。

彼は主人が傷一つ負わなかった事に、数瞬の間、強く満足感を覚えたみたいだった。

「敵は強いみたいだな、やはり俺が出向く」

「いえ……、私が……」

「お前はパイロットだ。腕の治療を早くしろ。それに、どのみち、此処まで踏み込まれば、お前のガンシップは役に立たない」

死の商人は、自らの部下に強く命じる。

十

ナイフを割れた窓の中に放り投げる。ナイフの先が鉤爪のように変形して、窓へと引っ掛かる。ナイフの柄には鉄の紐が括りつけられていた。

ドミネートは、窓から、中へと突入する。

中には誰もいない。トラップらしきモノも無い。

だが、確かに奴の気配があった。

「いるだろ？ 出てこいよ」

彼は冷たく言い放った。

くゆり、と。

紫煙が天井へと流れていく。

「ほう？ 俺が此処に残っている事をよく分かったな」

黒服の男は無感動に言う。

「気配を消していなかった。……お前がミソギだな」

「そうだ。お前が首を狙っている男だ」

二人の対面は、そっけのないものだった。

「お前の名は？」

「聞いてどうする」

「これから、ビジネスの交渉に入ろうと思うんだが。お前は俺とよく似ている瞳をしている。何の利害があって、俺を狙うのか分からないが」

資本家は、含み笑いを浮かべていた。

「お前、俺のボディー・ガードにならないか？ これだけ出す」

ミソギは指先を立てていく。

ドミネートは呆れる。

「ふざけやがって、……そんな金じゃ動かない。何よりも、それ程の大金に執着は無い。億か？ それとも、兆くらいは出せるのか？ 指先は三本、三億か？ 三兆か？ それとも、俺をコケにする為に時給三万、三千とか言い出すのか？」

「三国だ」

ドミネートは、ひゅん、ひゅん、と、鎖ナイフを振り回す。

そして、ミソギの言った事をよく聞き取れなかったみたいだった。

おもむろに、ミソギはドミネートに跪く形で、膝を地面に落とす。そして、両手を握り締める

。「失礼しました。わたしは貴方に現金では還元出来ない地位をお与えしようと思うわけです。いかがでしょうか」

ミソギの口調は、張り付けたように丁寧で、そして小奇麗だった。対象的に、彼の瞳は、ギラ付き、そして何処までも空ろだった。

ドミネートは、口を開いたまま、鎖ナイフを地面に叩き付けていた。

「何を考えている？」

「わたしは三国を貴方に差し上げると言ったのですよ。××国と×国、それから、×国か×××国などいかがでしょうか？」

今度は、ドミネートが腰を地面に下ろしそうになった。そして、奥歯を噛み締める。

「お前は……、正気で言ってやがるのか？ 命乞いのつもりか？」

こいつは……。

こいつは、……、自らが、あらゆる国家の君主よりも、地位が上だと言っているのだ。

「××国は人口3億人、貴方が統治するのは良いですよ。最近、国際競技場も作られました。石油資源が豊富です。×国の方は人口1億人にも満ちませんが、何よりも海に面していて、自然が豊かに残っています。好きなように開拓されると良いでしょう」

ドミネートは後ずさりする。

……こいつは……。一体、何を言っている？

「お前は、国家をこの俺に売ろうとしているのか？」

「ええ、貴方の指令一つで、これらの国々の主を恐喝致します。表向きの統治は彼らに任せますが、膨大な資源は貴方の手元に渡るのでですよ。私と同じように、世界を裏から支配しませんか？ 人口の増減、国策、国立設備、国家のデザインは貴方の手により行われるのですよ。どうでしょう？ 国家の君主になれるのは」

ドミネートは、奥歯を噛み締めていた。

「お前は……、戦争屋だったな」

「ええ、無論です」

黒いスーツの男は、まるで邪悪な、生命を冒瀆する悪魔のように見えた。

ドミネートは心の中で、自らを恥じた。

精神的に此方の方が押されている。こいつは自分を丸めこもうとしている。今、始末する必要さえ無いのだろう。自分が不必要だと判断すれば、容赦無く暗殺するだろう。今は、今だけは懐柔しようとしているのだ。

絶対的で、圧倒的な力を有しているからこそ、ドミネートの前でへりくだる事が出来るのだ。

「取り敢えず、金を寄せ。現金でだ。今は無いのか？」

ドミネートは苦肉の策を出す。

ミソギは立ち上がり、指先を弾く。

すると、彼の背後から、彼の使用人らしき人物がトランクを持ってくる。

「ええ、この中には現金で、一億程、入っています。何ならトランクを追加しましょうか？」

「いや、それだけでいい。お前が開ける」

ミソギはトランクを開く。中には、札束がぎっしりと詰まっていた。

「貰うぞ」

ドミネートはそれを受け取る。

「これは、なんだ。交渉内の“コーヒー”みたいなものだ。そう受け取らせて貰うぜ……」

ドミネートは牽制するように言った。

「ええ、構いませんよ。そのトランクのモノは、応接室での一杯のコーヒー程度の値打ちですよ」

完全に舐められている……、支配者は、そう感じた。

「二日……、いや、三日程、時間をくれないか……」

「構いません、72時間で良いのですね？」

「それ以上になるかもしれん」

武器商人の柔和な、邪悪で歪に、柔和な笑みを浮かべる。

「ああ、それから」

そして……、ミソギは、まるで死刑執行人のような事を告げたのだった。

「もしかして、貴方の母親ですが……」

瞬間、ドミネートは、ミソギに向かって発作的にナイフを投げようとした。……寸前で止まった。

「生涯の保障は致します。我々の会社に任せて下さい」

十

ドミネートは、シグレと落ち合う。

建物の陰だった。

「どうだった？」

シグレは急かすように言う。

「俺の負けだ。買収された。ミソギは……倒せない。奴は、……強過ぎる……」

ドミネートの顔は、短い時間の中で、強く憔悴していた。

シグレは、彼の言い草をまるで理解出来なかった。彼はもっと冷静沈着な筈だ。何事にも動じない男だと思っていたからだ。

「無傷だな……。お前、何をされたっ！」

「資本に負けたんだ。それから奴は……、俺の母親を人質にすると暗に言いやがった。俺には護るべき家族がいる。シグレ……、お前がそうであったように……」

ドミネートはミソギから貰ったトランクを開ける。そして、中にある幾ばくかの札束を、シグレに向かって放り投げた。

「元少年兵共の今後の未来の為に使ってやれ。……」

大男は、札束に唾を吐き、それを踏み潰す。まるで、自らの呪われた人生を払拭したいかのよう、彼はその物体を念入りにアスファルトでグシャグシャにしていた。

「ふざけるな、俺は行くぜ」

シグレは背中から、半透明の腕を生やす。

モニカンの大男は、ミソギのいるホテルへと向かっていった。

「勇敢だな。俺は今は降りるぜ。……力が必要だ。奴を暗殺する為のな……」

ドミネートは奥歯を噛み締めていた。

ミソギ……。世界を裏から操る軍事産業に手を染める男。

彼とは、三日後に再び、交渉するという約束を取り付けている。答えは決まっている。NOだ

その間に、自分の母親を安全な場所に避難させる必要がある。

射撃音が鳴り響いた。

シグレが血塗れで、ホテルから振ってくる。

おそらく、返り討ちにあったのだろう。

その後で。

おそらくは、シグレが付けたのだろう。ホテルの所々が発火し始めていた。

十

ミソギは右の袖の中に仕込んだ自動小銃を、再び、袖の中に戻す。

「ドミネートは三日後、俺を殺しに来るぞ」

武器商人は、淡々と言った。

「あの大男はトドメを入れますか？」

機関銃を手にした男達の一人が、ミソギに訊ねる。

「どうでもいい。好きなようにしろ」

狂王が、別の部屋から顔を出す。

「あの男の家族は、私の部下に張り込みをさせましょうか？」

「必要無い」

ミソギは煙草に火を付ける。

「見たか、狂王。これが金と武器の力だ。奴は簡単に膝を折った」

ガンシップのパイロットは、無言で上司の横顔を見ていた。

「護るべき者がある奴は、この俺を殺せない。それが資本の力だ。俺が手にしているのは、世界の覇権そのものだ」

彼の煙草は危険な薬物が混入されていた。

彼はしばらくの間、襲い掛かってくる幻覚を見て、それを愉しんでいた。

「奴は結局、中途半端な選択をした。俺の部下になって、統治者になるわけでもなく、仲間の厚意に応じて、俺の話を中心に無視するわけでもなくな。読めた、それが奴の力量だ。強力な能力者なのだろうが。奴は資本の数字を前にして押し潰されたんだよ」

戦争屋は吐き捨てるように言っていた。まるでそれ以外に、この世界に何の価値も無いとでも言うかのように。あるいは、実際、彼は金と武器と数字以外にこの世界に価値を見い出せないのだろう。

ホテル全体が炎に包まれていく。

そこは、所謂、彼が“自宅”と呼んでいる場所だった。

山の中に立てた一軒家だった。此処からは海も見える。

そこに、一人の女が住んでいた。

此処が、彼にとっての世界の全てだった。

彼は玄関の扉を開ける。

「ただいま」

フローリングの床の上に脚を乗せる。

一人の金髪のをした女が、毛布に包まっていた。

もうすぐ、初老を向かえる年齢だ。皮膚は年齢相応の皺が刻まれているが、髪の色は未だ衰えていなかった。

その美貌は、まだ健在なのだ。

母は、虚ろな眼をしながら、ドミネートを眺めていた。

「あら、帰ったの……」

「稼いできた。花壇はどうなっている？」

母親は答えなかった。

ドミネートは、庭の方を見る。花は次々と枯れていた。

家の中を調べていく。

彼は冷蔵庫の中を開ける。食料品は腐っていた。

「……また錠剤だけで暮らしたのか……」

身体健康には良くはないだろう。

だが、もう彼女が生き続ける事に、どんな意味があるのだろうか？

母親は震えていた。

どうやら、ドミネートが持ってきて、取り落としたナイフを見て、心的外傷のフラッシュバックを引き起こしてしまったらしい。まただ……。どうにもならない。

「いや、……、私の身体、挿れていいから。それを向けなくて、……向けなくて……」

彼女は泣き続ける。

ドミネートが生まれて、二十数年以上は経過しているのに、壊れた彼女の心は修復されていない。

どうすればいいかわからない……。

ドミネートは、意図的に母の心の傷を開いてしまう。それは“確かめる”為なのだろう。このような事をすれば、どれだけ母の心に負担が掛かるかも理解した上で、引き金を引いてしまう。それは、世界に対する呪詛を確かめる為だ。

自分の生は、呪いであり、屈辱だった。

ドミネートの母は、かつて強い能力者だったらしい。けれども、囚われの身となって、捕虜収容所に入れられて、毎日、男達に輪姦され、屈辱的な性行為をやらされて、心が完全に壊れてしまった。ドミネートは父親の分からない子供だった。幼い頃から、自分は何の為に存在しているのだろうか、と思わずにはいられなかった。髪の色は黒髪だ。瞳の色も違う。顔立ちは何処か似ている。

一体、自分は何者なのか……？

「裸になる、裸になるから、その子の代わりに、私の……………」

「もう、いないよ。大丈夫。そいつらはいないから」

ドミネートは、母の目の前にある、ナイフを手にして隠す。このナイフを見て、母は何を“視ている”のだろうか？ ナイフそのものによる脅しなのか？ 拷問具を想起しているのか？ それとも男性器を彷彿させるのか？ 真実は彼女の中にしかない。包丁を握る事さえ出来ない。

分かっている事実は。

自分達は生きるに値しない命として、棄てられたのだ。それが、幼少期に嫌でも、ドミネートの中で心に根を張る禍根だった。幼少期の頃は、それでも、母親は彼に文字の読み書きなどを教えてくれた。……彼女の心の崩壊が加速したのは、彼が年齢を重ねていつからか。色々な場所を転々として行って、蔑まれた。生活保護……、フード・スタンプなどで暮らすしかなかった。十代の前半から、ドミネートは自立する事、一人で生きる事を真摯に願っていた。誰からも蔑まれない為に……。

何故、自分達は近所の者達から、嘲笑を受けるのか？

何故、母親の身体中には、首から下に酷い虐待の痕や、プリンティングの文字や、性器の損傷などが存在するのか？ 徹底して、人間扱いされなく、性玩具として、生きた実験動物として扱われたのだと、正気だった頃の彼女は言い続けた。

ドミネートは、十に満たない頃から、皿洗いのバイトや工事現場などにも赴き、レジ打ちなどもして、肉体労働などにも勤しんだが、結局は裏の世界で生きるしかなかった。それは“烙印を押されて生まれてきた者”。力を持って生まれてきた者の定めなのだと、理解するしかなかった。自分が弱者だと認めたくはなかった……。

なら、力を持って、この世界と戦うしかないのだ。

堪え切れない程の感情を抑えながら、ドミネートは、微笑みかける。

「リジー」

母は、彼を呼ぶ。

「俺はドミネート……、＜支配する者＞、そんな名前だよ。ねえ、母さん、俺の本当の名前は決めてないだろ？ この前はベベズと言ったね。昔はザッシュ、だっけ？ 仕方ないから、俺は自分で、俺の名前を付けた。ねえ、母さん。いつも見ている女の子は誰だよ。一緒に閉じ込められていた子？」

彼は優しく、彼女の頭を撫でる。

「口口はいるかい？」

その名前を聞いて。

母の中で、人格の切り替えが起こる。

「ああ、ドミネート」

ロロ、という人格は、別の表情を見せた。暗く陰鬱で、そして明晰そうな顔だ。

「ネメアは偉かったよ。仲間は裏切ったのに、ネメアは裏切らなかった。だから、こんなになっちゃったんだけどね。収容所の中は陰惨で、絶望的だった。みんな生きる為に、仲間を裏切るんだ。看守や拷問者達に媚びようとする。ネメアはそれをやらなかった。だから、集中してやられた時であれば、完全に徹底して無視された事もあった」

「そうか、偉かったんだね、ネメア」

ロロの証言が、何処まで本当なのか分からない。所詮は母であるネメアの創り出した、ストレスを緩和させる為の別人格に過ぎないのだから。彼女が外に出てくる時は、母はマトモに家事をする事が出来たり、生活の為にショッピング・センターなどに行き、買い出しが出来る。

そんな時、とても不思議な気分、自分に娘が出来たような気分になる。

そう言えば、母親はPTSDの症状が一番、苦しい時はよく笑っていた。

収容施設の中でも、よく笑っていたと言う。強姦され、拷問を受けている最中にも笑っていた、と。

それは前向きに生きようとか、生ぬるい感情からではない。

悲しみ、苦痛、絶望、それらを通り過ぎて、ただひたすらに脳が限界を超えてしまい、人間としての人格が崩壊し、尊厳も何もかも奪われ、物体としての自分を感じ取って、ただ、死にたい、という限りない衝動として、笑い続けたのだ、と。……………。

十

ドミネートは母親の為に戦っている。

それ以外に、自分が存在している事に根拠が見い出せないから。いつか、母と離れ離れにならないのだろうか。母の死後に、どう生きるべきかを、最近は考え続けている。

何の為に自分は、この世界に生まれ落ちたのか？

父親が誰かを知りたくもない。父親の顔を知れば、強姦魔が父親である、という屈辱に耐えられそうにないから。

生きる事の意味を見つけたい……。

ドミネートは信じるしかなかった。そういう理想のようなものがあるのだと。彼は自分という形象を、自分で創造するしかなかった。自分の人格は世界全てから否定されているのだ、だから、勝ち取って手に入れるしかないのだ。

この世界では、力の無い者、負けた者は否応なしに踏み躪られる。

所謂、社会的ダーウィニズムと呼ばれているものが、この世界を支配しているんじゃないのかと思う。それは極めてグロテスクな自然の掟の模造のようなものだ。適者生存、自分はこの世界という環境に適応出来なかった、受け入れられなかった。

ただ今は、憎悪よりも、希望に可能性を見い出したいから……。

ミソギと再び落ち合うのは、48時間を切っている。

今日、一日くらいは、彼女の傍にいるつもりだ。……………。

もしかすると、二度と、彼女に会えなくなるかもしれないから……。

2

夜風がはためていている。

過剰なまでに装飾された時計塔のビルの上に、男は佇んでいた。

酷く、闇が、死の色が似合う男だった。

夜を表象する者達は、様々な相貌を持っている、闇の色彩の中で、時には妖艶であり、時には眠りへの落下であり、犯罪者の狩り場であり、死への門のようでもある。

戦場の臭いだ。

紺色のスーツを着て、ミソギはビルの屋上で紫煙をくゆらせていた。

彼は断片的に、昔の事を思い返していた。

かつて、現役だった時代の頃をだ。

「子供の何名かは、お前が俺にくれた、汚れた利潤によって手にした金を受け取ったよ。……………、残りは俺の為に使わせて貰った。しっかり、お前の入れてくれたコーヒーは飲ませて貰ったよ。腐敗した砂糖入りで甘い味だよ……」

ドミネートは、忌々しげに告げる。

その腐食に、自分も飲み込まれているのだ。

「ドミネート。私には、敵も味方も無い。意味が分かるな？」

死の商人は告げる。

そして、自らの矜持を述べていく。

「この世界を回しているのは、金と権力だ。宗教も政治も、全て金にひれ伏す。そして、更に、もっとも金を産むのは、武器だ。他人の死だ。俺は、幼少時から、その真理を理解したんだ」

まるで、幼子に教え諭すように、彼は言葉を吐いていく。

支配者は、決して、彼の言葉に耳を傾けない。

「シグレは死んだ。……彼は最後に何を賭したんだろうな？ 何を願ったんだろうな」

彼は奥歯を噛み締める。

眼の前にいる敵を倒さなければならないと思った。

ドミネートはナイフを投げる。

ミソギは。

左腕で、ナイフを弾き飛ばしていた。金属音が鳴る。

ミソギの手には、いつの間にか、拳銃が握られていた。引き金が引かれる。ドミネートは、走っていた。

お互いに、間合いを測っていた。ミソギは動かず、ドミネートは走り続けていた。

空から、何かが光った。

黒塗りのガンシップから、黒塗りの弾丸が撃ち込まれる。……能力者は、鉛玉さえも見切る。だから、夜目でも、無効にされるように……。

静かに、攻撃の発射音が鳴っていく。

ガンシップの表面に、ナイフが突き刺さる。……いや、それはナイフというよりも、巨大なスピア……投擲用の槍へと変形していた。

スキッドの部分に、鎖が巻かれていた。

ガンシップが揺れる。

「本当はプロペラ部分……、メイン・ローターに巻き付かせて、墜落させるつもりだったんだけどな」

十

「ほう、俺の“ハイバーナイト”を射落とすつもりか？」

狂王は興味深そうに、敵を凝視していた。

「俺は天空を制覇する者だ。ミソギ様の片腕だ。貴様ごときが相手になると思うな！」

やりがいのある目標を見つけたかのごとく、彼は叫ぶ。

彼は窓を少しだけ開く。

そして。

巻き付いた鎖も、突き刺したナイフも、機関銃によって破壊していく。

十

ミソギは愉悦の笑いを浮かべていた。

まるで、ドミネートとの戦いを、心底、楽しんでいるかのよう。

「戦場を思い出すよ。薬物よりも、より高度なトリップが出来るんだ。恐怖が快楽に変わる瞬間、万能感に変わる瞬間を思い出すよ」

それは。

煙が辺りに充満していく。

むせ返る程の煙だ。このまま、脳に酸素が行かず、中毒死しかねない程の。

「ドミネート、支配者。この俺を本気で殺しにこい。どうせ、俺は幼少期から使ってきた薬物によって、肉体はボロボロだ。最新の医療機関でさえ、治らない。いや、治すつもりが無いのかもしれないな。何故なら、俺は自らの生まれた意味を肯定したいからだよ」

今や、彼は両手に拳銃を握り締めて、引き金を引いていた。

薬莢が飛び上がっていく。

ドミネートは、ミソギの攻撃を避け続ける。

空から。

ナパーム弾が、バラ撒かれていく。

白リン弾だ。水に浸かっても、その炎が消える事が無い爆薬だ。

ミソギは、狂王に命じた。

.....、自分を巻き込んでも、構わないのだ、と。

狂王は、唇を震わせていた。ミソギは、命令だ、とだけ告げた。

十

ドミネートは、ミソギの心の奥底が、何処となく分かっていた。

あれは、元少年兵。.....死に場所を探しているに違いない。この世界でどんなに栄華を極めても、彼の心を満たすものは、何も無いみたいだ。あらゆる国家を裏から支配出来る権力を有していたとしても、そんなもの、彼にとって幸せを感じられないのだ。

そう、アレはもうこの世界を何となく、ただ、何の意味もなく生きているだけのよう存在だ、死体が動いているようなものだ。

ドミネートのように、不具ながらも、家族への愛があったのならば.....。だからこそ、自分は此処で、彼の破滅願望に付き合っやるつもりは無い。心が壊れた母親に、何かほんの少しでも、やり続ける事。それが自分にとっての生きる使命なのだから。

この身体に流れている、母親の血がそうさせるのだから。

ドミネートは、ビルの壁面にナイフを突き刺していた。周辺には、飛び移れるビルが存在しない。だが.....。

.....何よりも邪魔だったのは、彼の護衛だった。

あのガンシップ、あの上に飛び移れないものか.....。そして、まず空の蠅を地へと落としてやる方がいい。

いや.....。

狙うのは、ミソギのみだ。

他は考えなくていい。

十

焔の中、ミソギは確かに空を見上げながら、嗤っていた。彼の脳内の中で、かつての記憶がフラッシュバックしていく。地雷やゲリラの恐怖。夜のジャングルの戦闘。眼の前に迫ってくる死。

彼は少しだけ、ほんの少しだけ、昔の事が頭の中を過ぎる。

何かが、投げられていく。

ナイフだ。

「おい。ドミネート、なあ、ドミネート。そこにいるんだろう？ もっと、俺の近くに來いよ。俺を楽にするんだろう？」

彼は哄笑していた。

「これじゃ、俺を殺せない……」

ナイフは。

ブーメランの形へと変わり、ミソギの背後へと向かっていく。

避ける間も無く。

ミソギの背中が、えぐり取られる。

更に。

投げたナイフが全て、ブーメランへと変形して、ミソギへと向かっていく。空からの銃撃によって、他の全てのブーメランは叩き落とされる。

プロペラが弾け飛ぶ。

それは、巨大なランスだった。騎士の持つような槍だ。

それは、一直線に、銛でも撃ち込むように、ガンシップのプロペラに突き刺さっていたあっけない程に。

そのまま、黒塗りのガンシップは旋回しながら、落下していく。

十

……お前の居場所なら分かっている。

狂王は、高層ビルの時計塔の辺りへと、弾丸を撃ち込んでいく。このビルは防弾ガラスでシャットアウトしていて、仮にガラスなどを破って中に入る場合、大音響が聞こえる筈だ。

巨大な時計の針の後ろ。……、そこに、ドミネートは隠れていた。

ガンシップは、落下していく中、確かに時計の針へと、ナパームの弾丸を撃ち込み続けたのだった。……………。

十

「いいか、ドミネート。覚えておけよ」

まるで、命じるように、死の商人は告げる。

彼の服の所々が、炎で焼けていた。煙が上がり続けている。

まるで、死人が未だ彷徨い、歩いているみたいだった。

「この世界に存在するものは、俺達の住まう資本主義の世界では、全てが”商品”だ」

彼は虚ろな声で、虚ろな言葉を投げ掛ける。

「命も人権も福祉も芸術も文化も、哲学も、全部、金で買えないもの、金と交換出来ないものなんて無いんだ。分かるな？」

ミソギは冷たく嘲る。

「人間は増え過ぎた。だから、優性思想、階級を欲したんだ。他者の命も自己の命も金と交換可能なもんなんだよ。感情とやらもな。最後には金と武器、そう、暴力に屈する。人間なんてそんなもんだ」

彼は矜持を持って、告げる。

「S国では人間に記号標記のラベリングをして管理する、K国では労働価値の無いものは廃棄処分されて収容所に送られる。B国では、拷問が慢性的にビジネスと化している。何故、そんな事がなされるのか？ 全部、金になるからだよ。どんな非人道的な行為も、商品になるからだよ。いいか、人間なんてそんなもんだ。商品価値の無いものなんて、この社会に無いんだよ」

その声は、ただ何の感情も無い程に冷徹だった。

「そして俺は武器を、銃器を、爆弾を信仰している。強大な暴力のみが、商品価値のコントロールを一番に操作する上位存在なのだからな」

焰の中、男はジッポで煙草に火を付けていた。黒い背広の裾に灰が落ちる。

それは憎悪に満ちた瞳であり、声音だった。

世界中のあらゆる生命を憎んでいるかのようにだった。そして、嘲っているのだろう。

ミソギは口から、紫煙を黒焰の中へと拭き掛ける。

「命は交換可能なんだ。俺もお前も、お前の母親もだ。そうやって世界は回っていくんだ。俺達が殺し合っても、お前が俺を殺したとしても、世界の構造は何も変わらない。分かるな？ 下らない茶番だろう？」

死の商人の顔は、煙で揺らめいて見えない。

その輪郭はぼやけていく。

「ミソギ」

ドミネートは告げる。

「それでも、.....それでも、俺は.....人間で在りたい。人間の定義が何なのか、今の俺には分からないけれどもな.....」

武器商人の言っている事は、きっと正しいのだろう。

自分は、そのような資本によって支配される世界の中において、つねに自らが犠牲にされ続けて生きているのだと感じているのだから。

「大切な肉親の為に、俺は生きて、戦っている。正義にはなれない。子ども達の中で、高潔な者達は金を受け取らなかった。俺は.....彼らを尊敬する.....」

だから、それでも、この世界に、この世界の価値に“否”と返すしかないのだ.....。

「俺は商品じゃない、.....交換可能な、この世界の部品じゃない。お前もなんだ.....。俺の母も、未来を創る子ども.....、命は商品じゃないんだよ。俺はそれを信仰している.....っ」

「そうか。貴様はビジネスマンには向かないな」

ミソギは拳銃の引き金を引く。

ドミネートも武器を変形させて、同じような拳銃へと変えていた。互いに引き金は引かれる。

銃弾の音。

「そして、国家も文化も、人権も、芸術も.....、資本の奴隷なんかじゃない。俺はそう信じて闘っている.....。武器は、命を殺す為の道具じゃなくて、命を勝ち取る為の道具だ。だから、俺の能力はあらゆる武器を創造するんだ.....っ！ 俺は俺の父親が何者か分からない、だから、俺は俺という命を自ら創造するしかなかったんだよっ！」

彼は何もかもを吐き捨てるように、感情を剥き出しにしていく。

夜は明け始めていた。

十

あらゆる人気のヒーロー・キャラクターとコラボしたカジノ。

市民運動家の拷問や収容に使われる、かつてのサッカー・スタジアム。

過剰なまでに、一般市民を守る事を喧伝したテロ反対の看板。

全部、ゴミクズで、全部が、自分を馬鹿にしているように思えた。

この街の秩序は、何が腐っているのか分からない。

ドミネートは、大金の前に、一度、ミソギに屈したのだ。そして、敵から貰った金を、未だ手放す事が出来ずに、母の精神医療などに使ってしまった。……自分は理想の下では生きられなかったのだ。

この世界を支配しているのは、金であり、商品であり、金融だ。そして、その頂点に位置するものが“武器”なのだ。暴力の前に、みな、魂を売る。どんな理想も人間愛も、美学も、全ては金の前にはひれ伏して、全ては形骸化し、偽善となり、パッケージだけの空疎な御題目へと変貌するのだろうか。

世界は空虚で、何もかもが嘘ばかりだ。

かつての少年兵達は、いつ、この世界で生きる事を諦めるのだろうか？

彼らの名前は聞かなかった。でも、顔は忘れない。

彼らは、これからも様々な選択をしなければならなくなるだろう。

大きな理想の下に、彼らは生きる事が出来るのだろうか？

ドミネートは、ふと、生前、シグレがよく常連をやっていたというバーに赴こうと考えた。

……………

十

ドミネートは、アルコール度数の低い甘いカクテルを口にする。そして、ほろ良い気分で、バーの中にある、蓄音器を眺めていた。

此処で、シグレは仕事と家族の事を考え、自分の人生を見つめていたのだろうか。

何者かが、武器使いの方へと近付いてくる。

「お前、ドミネートだろ？」

少年だった。彼から、ミソギに貰った金を受け取らなかった少年だ。

「ゼルドがああの死の商人の下部組織の一員になりやがった……」

ドミネートは、グラスに口を付ける。

「また、……この俺を殴るか？」

「いや……………」

「あいつは、ゼルドという名だったか。お前は？」

「ギア」

「そうか。お前は今、何をやっている？」

「ゴミ溜めみたいな場所の清掃員。給料は安いよ。よく叱られる。でも、満足している……」

そして、ギアは自らの収入と、仕事の内容を話す。

「そうか。俺にはとても、勤まらないな。お前は誇りを持って生きているんだな。なあ、今後、何がしたい？」

「親友が死んだ。覚えているか？ 俺の隣にいた、赤毛の……」

ドミネートは、顔は思い出せないが、何となく、そんな少年を思い出す。

「何故、死んだ？」

「ミソギの企業を崇拝しているゴロツキ。そいつに足を撃たれた。……ミソギ自身はもう、俺達に興味が無いんだろ？」

「ああ、約束させた……」

「下っ端なんて、ろくでも無い事考えているよな。なあ、俺の親友、高熱で躓かれていて、最後にやっぱり金を貰えば良かった、って、俺に怨嗟の言葉を吐き続けたんだ。足の治療くらい、金があれば出来た筈だ、って。でも、足からバイ菌が入って、医者にも行けずに死んだ。ドミネート、お前、俺のやった事、正しかったと思う？」

「分からない。俺も、何が正しいのか分からないんだから」

しばらくの間、二人は沈黙する。

誰を、何を恨めばいいのか分からなくなる。

二人は知っているから。ミソギも、この世界の金融という化け物の犠牲者の一人ではない事に……。

十

命はゴミ屑なのだろうか？

それは、自分の考えではなく、この世界を支配する者達が考えている理念なんじゃないのだろうか？

少なくとも、ミソギは命をゴミ屑だと思っている。それは自分自身さえ当て嵌まるのだろう。彼はそういう環境で育って、そういう風に生きるしかなかった。ドミネートは、もし、母親の事がなければ、この世界を本当に無価値なものだと考えていたかもしれない。無価値である、か、あるいは金と権力と暴力のみが全てを決定するのだと……、たとえば、愛情だとか、美意識だとか、そういったものを理解する事は出来なかったのかもしれない。

自分は所謂、フリー・ランサーであり、アウトローだ。

もし、この世界をそっくりそのまま変革したい、という行動に出るとするならば、きっと自分は“革命家”とでも名乗るしかなくなるのだろうか。

そんな大層なものには、きつとなれないのだろう……。

今、やるべき事は一つだ。

……………。

シグレの墓へと向かおう。

花を届けるつもりだ。

死後の世界を少しだけ夢想にして、そこに何の意味も無い事に気付く……。生きていなければ、どんな願いも叶わない……。

金ってのは何なんだろう？ この世界を支配している化け物だ。子供の頃から、貧困に苦しみ、周りから蔑まれながら生きてきた。自分自身は汚れたものだと思った。

そう。

確かに感じているのは、この世界は病んでいる。

絶望が毒素を吐き散らしながら、押し掛かってくる。

抗えば抗う程に、踏み躪られている気分になる。

誰かの生み出した悪意によって、翻弄されていく。

自分がこの世界において、一体、何者なのだろうか？

全ては滑稽に、支配者の気分によって収奪され、壊されていく、玩具でしかないのかもしれない。奴隷や家畜というよりも、むしろ……玩具、だ。

人間は、金という神様によって支配し、好き勝手に創り壊され、凌辱し、凌辱されるだけの玩具だ。そこに夢も希望も理想も、踏み躪られて、あるいは捏造されていく。

生きる意味とは、一体、何なのだろうか？

人類は金と、金を流通させるという概念を生み出した。それは英知の結果なのだろうか？ けれども、それはどんな価値も美も、信念も、金という異形の怪物によって、コントロールされ、ねじ曲げられ、蝕まれ、蔑まされ、造り変えられていく。

今、自分の立っている場所が分からない。

この世界は、誰かの生贖によって、存続しているのだろうか。

マイナスからのスタートだった自分の人生は、プラスになるのだろうか？ 今は光がまだ見えない。全ては冬の闇に閉ざされている。

もはや、この腐った世界では、古臭くて、時代遅れで、異端の考えなのかもしれないけれども、金よりも、略奪よりも、上昇志向よりも、……、

弱い者達の命や、人権の方が、価値があるものだと、信じたいから……。